

本徳寺復興事業から学ぶ

大門の履歴

宝永の大地震から三〇〇年

中世からの寺院は築地が巡らされ、必ず門をもつ。外界の騒々しさとは対称的に境内は静寂である。門をくぐるとそこは聖域。人間中心の空間から仏中心の空間に一瞬のうちに変化する。大門、鐘楼、向拝、灯籠、臬とした白洲の空間、そして本堂の内陣のお荘厳は、仏とその教えの何であるかを、五感を通して、そこに踏み入る者の心に浸みとおつていく。

生から死へ、生きとし生けるものが、必ず一度は往かなければならない一筋の道をこれほどまでに荘厳する空間は地上にはない。古来、人は、大門をくぐる度に、「いのち」を意識して来たのである。

本徳寺の大門

平成十二年四月より大門（文化財）の修復が始まり、五月下旬、屋根部の解体に際して、棟木に張り付けられていた棟札が発見された。これによって、今まで史料に乏しかった本徳寺建造物の建立経緯の一部が明らかになった。

棟札は幅14.5cm・長さ145cm・厚み1.8cmの檜



本徳寺・大門（四脚門）正面表参道より

製板で、同型の二枚板を重ね内側に由来を墨で記銘してあった。堅く重ねて棟木に釘留してあったため、三百年程経過しているにもかかわらず内側の面に書かれた墨守は鮮明で明確に読み取ることが出来た。

これによれば大門は宝永六（1709）年七月二十二日に上棟し、八月には完成したようである。建立は二年前に起こった宝永の大地震（707/10/28）で、寺の建物に被害が及び、広間や書院・大門などが大きな損傷を受け、元禄十二年（69）に入寺された本徳寺九代寂宗公が播州の各寺院を巡られ再建の協力を求められたらしい。この事実から本徳寺の建物に相当の被害があったものと思われる。

棟木に「貫物（資金）到来を以てまずこの御門かくのごとく建立」とあることから、播州一円の門末から募財が寄せられ、まず最初に大門が新築されたらしい。しかし、大門の一九八四年の文化財指定の際の調査では建立時期は古老聞書により嘉永年間（1808～1830）と推定されていた。この棟札によって、一挙に百四十年

程建立時期がさかのぼり、今から三百年程前に建立されたことが分かった。さらに、棟札の記載によれば、大門建立後、大広間、書院が修理され、経堂（726年）が新しく建立されたようである。

本徳寺の建物は元禄の頃にその伽藍形式が整えられたと云われていたものの、建設年代を示す史料が乏しく憶測に過ぎなかった。間接的には、各建物の部材に残された年号



大門正面獅子彫像

から、元文三年（1738）/本堂宝珠柱名、享保六年（1721）/広間天井画、貞享二年（685）/広間正面飾棟瓦銘記、寛延三年（1750）/広間正面飾棟瓦銘記、延享四年（1747）/庫裡獅子口、享保十一年（1726）/経堂建立・本徳寺資料（石碑）、安永三年（1774）茶所獅子口、安永（1772-1778）/太鼓楼懸魚臬、元禄四年（68）/大玄閣獅子口、等が確認されている。一方、建物覚書では十七世紀のものが過半含まれている。覚書の信憑性が残るが、以上の諸史料を手掛りに推測すると、秀吉の寺領寄進により、一五八二年に英賀から龜山に中世の建設物が一部移築され、その後一世紀をかけて、元禄頃に大体の伽藍構成の基本が出来上がり、一七〇七年の大地震で大破したのをきっかけに十八世紀を通して、伽藍全体の整備がされたように思われる。

この門の上部には大型の彫刻が多数かけられている。真ん中に龍、東西中央に阿吽の獅子、南北鼻木に阿吽の象、その他4箇所に仙人像が、組込まれている。何れも迫力のある象形で、見る人を飽きさせない。作者は現在不明であるが、その力量に圧倒させられる。

地震について調べて見ると、その後、百四十八年後の安政元年（83）に安政の大地震があるが、この時に本堂が大破したことが記録に残っている。その結果、幕末から明治に大普請がなされた。さらに、百四十年後の兵庫県南部地震によって、この度の復興工事が始められたことを考えると、お寺の普請は地震と同じ周期であることが分かる。寺の修理は木材の耐用年数とは余り関係がなく、天変地異によるようである。

播州地方は地震が少ないと云われていたが、実際に

は約百五十年周期で巨大地震がこの地を襲い、寺院の頑強な建造物においてすら被害を及ぼしている。記録にはあまり残っていないものの、一般には家屋の倒壊など、相当の被害があったことが推測される。短い人の一生を超えた周期で起こる自然の脅威は、大層な想像力を我々にかき立てる。

今回の野路裏の調査では、大工道具（半リノミ）や寄進の同行地名を書いた木切も見つかった。当時の大工が忘れたものだろうか、一見今のものかわりがないようであるが、直感的に繊細さを感じることができた。現代の道具は機能優先であるが、昔の道具はなにかが違う。おそらくこの百年の間に、日本人がこぞ捨て捨ててきたものだろう。この文明社会ではまず実現できない繊細さと豊かさを感じさせてくれる。

大門棟札解読



（表）四足御門上棟 丑七月廿二日也

（裏）播州飾西郡龜山英賀本徳寺第八（九）世寂宗公、本願寺御門主寂如上人猶子として入院以後当国一派の寺方廻寺これある也。これに因つて当御門をはじめ広間・書院大破に及び、かつ（かつうは）経蔵の建立の企、先々披露これあり。よつて實物到来を以て、まずこの御門かくのごとく建立。時に宝永六己丑年（1709）八月吉日。

奉行人 森崎庄兵衛義貴

長谷川右衛門正辰

普請奉行 石川由右衛門

大工棟梁 大西利左衛門包道則当御寺内之住人也

井上徳左衛門宗清・多田八郎兵衛豊峯・松村市太夫末重

松村八右衛門安秀・多田重右衛門忠公（都倉町住人）

井上多右衛門宗成・大西伊兵衛包照

佐伯貞右衛門政清（姫路坂田町住人）